

## AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」2018年度第1回研究会（通算第7回目）

日時：2018年6月30日（土）14:00-19:00, 2018年7月1日（日）9:30-13:00

場所：東京外国語大学本郷サテライト5階

主催：AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」

共催：文科省科学研究費（基盤研究B海外）「アフリカ半乾燥地における農牧共生に基づく持続的農村開発に関する実践的研究」（代表者：鶴田 格）

出席者：鶴田 格、石川博樹、小松かおり、佐藤千鶴子、佐藤靖明、杉山祐子、杉村和彦、田中利和、松田正彦、藤本 武、藤岡悠一郎、石山俊、足達太郎、泉 直亮、原子壮太、加藤珠比、阪本公美子

### 発表1：足達太郎（東京農業大学）

#### 「昆虫学者からみたアフリカ農業」

極私的なプロフィールをとっかかりとして、アフリカとの出会いや日本の昆虫学をとりまく状況をまずのべた。エスノエントモロジーは広義の昆虫学の一部であり、アフリカで昆虫学の研究をするにはエスノサイエンスの知識や手法が不可欠である。農耕の起源については従来、おもに気候変動や野生植物の栽培化といった論点から説明されることが多かったが、ヒトが植物を植食性動物からまもる「作物保護 (plant protection)」という行為についても、農耕起源論のなかで今後もっと注目されてしかるべきだろう。農耕の歴史におけるいくつかの重要な「革命」のなかでも、「20世紀種子・肥料革命」は「ただの虫」を「害虫」化し、殲滅すべき人類の敵に仕立てあげたという点で画期的なできごとであった。その直後に出版された「沈黙の春」が世界的に注目され、総合的害虫管理 (IPM) が推進されたことは、この革命に対する反動とみなすことができる。IPM の萌芽は世界各地の在来農業のなかにみられるが、アフリカの在来農業革命の由来を歴史的・地理的にどこに位置づけるかは今後の課題である。混作の生態学的な本質は、資源の分断化と生態系の複雑化である。混作によって作物害虫が駆除されることはないが、大発生をふせぐ効果はある。混作圃場の生態系には **resilience** (耐久性、復元力) があり、アフリカの在来農業はその意味で「うたれづよい」特性をもっているといえる。こうした農法は近年、「緑の革命」のお膝元であるアメリカや東南アジアでも模倣されている。近年、アメリカからアフリカに侵入してさわぎになっているツマジロクサヨトウ (fall armyworm) への対策においても、アフリカ在来農業の潜在力が問われているといえよう。

## 発表2：石山 俊（国立民族学博物館）

### 「サハラ南縁の農業、サハラ・オアシスの農業：サーヘル・スーダン農耕文化とサハラ・オアシス農耕文化の現代的様相」

乾燥・半乾燥気候下にある、サーヘル・スーダン帯の農業と、その北に位置する極乾燥のサハラ・オアシスの農業が、大きく異なることを報告することが発表の目的であった。その違いの基盤にあるのは主に降水量の差である。年降雨量が、天水農耕限界値である300mmを上回るサーヘル・スーダン帯では、ソルガム、トウジンビエなどが5-6月から9-10月までの雨季の間に栽培される。他方、降雨がほとんどない、サハラ・オアシスでは「フオッガーラ」と呼ばれる地下水路導水システムなどによってナツメヤシ灌漑農業が営まれてきた。

どちらとも、乾燥気候下において、長い時間をかけて育まれてきた農業ではあるが、双方がもつ農業の現代的問題も異なる。サーヘル・スーダンにおいては、激しい降雨変動による穀物生産の不安定さ、食料流通に関する社会システムの未整備などが重要な問題である。発表者の調査事例では、不安定な降雨(特に干ばつ傾向)に対して、農耕民は家畜飼育頭数の増加させることが明らかになった。サハラ・オアシスで問題となっているのは若者の流出や、水源の近代化とその維持管理不足である。サハラ北部に位置し、地中海沿岸大都市への流通の条件に恵まれるオアシスでは、ナツメヤシの商業栽培品種の生産が活発であるが、サハラ中央以南の「僻地」オアシスでは、自給用ナツメヤシの栽培とともに流通可能な範囲にある比較的大規模なオアシス都市に向けた蔬菜栽培が発展しつつある。

## 発表3：小松かおり（北海学園大学）

### 「インターナル・フロンティアの農文化」

本発表では、コンゴ盆地を中心とする中部アフリカ熱帯雨林の農の文化と歴史の特質について検討した。

当該地域は、根栽農耕、混作、焼畑移動耕作という特徴をおそらく2000年前のバントゥーの移動の時代から維持してきた。一方、歴史的には、混作体系の中にさまざまな作物を受け入れながら、選択肢を保ち続けてきた。掛谷誠の「エキステンシブ」の概念を借りながら、農の開放性と馴化の過程として地域の農の歴史を描くことを検討した。

また、主食作物を中心に地域の農業史を描く方法として、「(作物)複合」という考え方を検討した。特定の主食作物が、土地利用・他の生業・栽培技術・食・社会関係の結節点になっている状況を指し、複合の要素は入れ替わったり結びつき方が変わったり、結びつ

きが強まったり弱まったりするものとして設定する。それによって、地域の農の変化を全体的に捉えることが可能になり、地域を越えた比較が可能になると考える。中尾佐助の農耕文化基本複合、栽培植物複合などの考え方との関係を整理しながら、現在、「バナナ複合」について検討中である。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.